

〔特集：わが国の父親と親役割〕

3. 変化しつつある父親

東京大学大学院教育学研究科

亀口憲治

はじめに

子どもの心理的な問題の背後には母親の問題があり、さらにその背後には父親不在の問題があることは、すでに繰り返し、指摘されてきたことである。しかし、最近、若い世代の父親を中心として少しずつではあるが、子育て参画意識が高まりつつある。臨床場面においても、とりわけ筆者らが推進している家族療法には多くの父親が積極的に参加するようになってきている。むしろ、伝統的な母子平行面接法に慣れ親しんできた臨床家や各種の援助専門職の側が、父親の扱いにとまどっている感さえ見受けられる。

本論では、これまで家庭や臨床場面で周辺的な位置におかれてきた父親が、現在どのように変化しつつあるのか、その背景の文脈を視野に入れながら、家族療法や家族臨床心理学の観点から問題を整理してみたい。

1. 3世代家族関係から見た父親の変化

(1) 父性の世代差

「14歳」は、ナイフ刺殺事件を始めとして多発する現代の子どもの問題を象徴する年齢となつてしまったようである。これら14歳の子どもの持つ父親の平均的な年齢は、40歳代前半であり、ポスト団塊世代の男性群でもある。先行する団塊世代の父親達が幼児期や児童期に戦後の社会的混乱や極度の物不足、あるいは同世代内での大競争に投げ込まれた発達初期の体験を経ているのに比べれば、ポスト団塊世代の父親達は、すでに、日本経済が高度成長期に入り、

物質的な豊かさを享受できる社会で子ども時代を過ごしている。いわば、物質面でのハングリー体験を欠いた世代だと理解してよいだろう。このポスト団塊世代の父親の子ども達が思春期になり、わが国の家族はこれまでとはまったく質の異なる心理的問題に直面するようになったのではないだろうか。

考えてみれば、父親自身にハングリー体験がなければ、その子どもが進んでそのような体験をすることは、地震や火事などのよほどの非通例的な出来事に遭遇する以外は、難しいだろう。もちろん、すべての子どもの心理的発達にハングリー体験が必須だと主張するつもりはないが、子どもから大人へ移行する思春期の発達課題を達成するために、何らかの「通過儀礼」を体験することが必要であることについては、議論の余地はないだろう（亀口、1998）。

代わりに、現代の日本社会が子どもたちに豊富に提供しているある種の通過儀礼は、「受験」かもしれない。しかし、この通過儀礼は、特殊な性格を持っていて、文化人類学的な意味での通過儀礼で強調される「非日常的な、一生に一度の体験」ではない。学校や塾で日常的に繰り返されるテスト体験は、子どもたちに「終わることのない日常」を予感させてしまっている。そこには、未知の世界への欲求や渴望が生まれる素地はきわめて乏しいと言わざるを得ない。多くの子ども達が心に描けるのは、一つの門をくぐってもまた次の門が待ち受けていて、ただそれを繰り返すだけの人生のイメージなのかもしれない。そうだとすれば、子どもたちが潜在的に成熟拒否の心情を増幅させ、むしろ幼稚化する傾向にあることを、誰が責められるだろうか。筆者の私見では、このような問題への積極的な取り組みから「父性」の新たな役割

が発見できるのではないだろうか。

これまでポスト団塊世代の父性に焦点を当てて論議を進めてきたが、それは先行する団塊世代やそれ以前の祖父母世代の父性に問題がなかったからではない。ようやく父性の課題に正面から取り組む世代として、ポスト団塊世代の父親にスポットライトが当たりはじめたにすぎない。とりわけ、団塊世代の父親(筆者もその一員である)にとっては、戦前・戦中の世代の父親とポスト団塊世代以降の父親の中継ぎ役を果たせるか否かが課題になるだろう。そこで、わが国の各世代の父親がかかえる共通の課題と個別のものとの区別することにしよう。

(2) 3世代関係の図式から見た父親の位置付け

まず、筆者が作成した3世代の家族関係の図式を使って父性の問題を多角的・多層的に整理してみよう(図1参照)。典型的な母子密着の状態にある不登校のIP(患者とみなされている人物)を例にとれば、図では母子間が太線で結ばれ、しかも両者が近距離にあるものとして描かれる。いっぽう、父子間の距離は離れ、しかも両者を結ぶ線は細く描かれる。夫婦間の絆はやはり細く、その関係の希薄さを表している。さらに、ここで強調したい関係は、父親とその母親、つまりIPからすれば父方祖母との母子関係である。わが国の心理面接に多世代的家族療法の視点を持ち込む最大の利点は、この2つの母子関係(図1の母子関係Iおよび母子関係II)を同時に視野に収めることを可能にする点にこそある。なぜなら、多文化的観点からすれば、儒教文化圏に属するわが国の母・息子間の情緒的な関係は欧米とは異なり、息子の結婚後も比較的強固に維持される傾向が強く、その次の世代でのIPの心理的問題の発生に少なからぬ影響を及ぼしているからである。

従来は嫁・姑関係の問題が表面化しやすかったために、夫とその母親との母子関係の問題に専門家の眼が向けられることは少なかったのではないだろうか。とりわけ3世代同居の家族で深刻であった嫁・姑関係の問題は、核家族化の進行に伴って徐々に低減した結果、心理臨床家に持ち込まれる問題は、核家

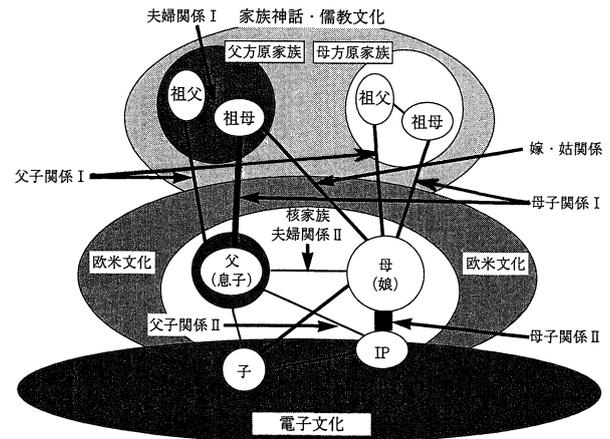


図1. 3世代家族関係から見た父親の位置づけ

族内の母子関係の問題に集約されるようになったのではないだろうか。しかし、家族療法の導入により、同居・別居の差異にかかわらず3世代の家族関係の全体構造を俯瞰できるようになった結果、背景に隠れていたもう1つの母子関係(母子関係I)にも眼を向けることができるようになった。

筆者は、不登校や家庭内暴力の問題をかかえた家族を対象とする家族療法の17年の実践を通じて、これらの3世代の家族関係には、2つの母子関係の間で微妙に拮抗する相互作用があることを見出した(亀口, 1997)。多くの事例で、IPと母親の密着の背景にはIPと父親の関係の希薄さが認められたが、同時に夫婦関係も希薄な傾向があり、他方で、嫁・姑間には顕在的もしくは潜在的な対立関係が存在していた。さらに、解決が困難な事例では、妻や子ども(IP)との情緒的絆は非常に弱いのに反して、自分の母親との情緒的絆は強固に維持している父親の存在が浮かび上がってきた。

表面的には社会的な役割を果たし、核家族を構成しているかのように見えながら、妻子との情緒的な関わりを避け、むしろ家庭外での職場の同僚や知人との情緒的交流を優先する傾向は、日本人の平均的な父親像とされている。しかし、そこに成人である父親の自身の母親との濃密な母子関係が加わると、家族システムの歪みはかなり深刻な様相を帯びてくる。数年以上続く不登校事例や、祖父母との3世代同居の家族の場合などに、その典型例を見ること

ができる。父親が十分な父性を発達させることができない背景要因は、何も父親自身の母子関係に限るものではない。父親が自身の父親に適切な父性の行動モデルを見出せなかった場合にも、父性発達に支障が生じるのは当然であろう。

そこで、同じ図1に示した父子関係IとIIの相互の作用にも注目する必要がある。一般論として、強固な母子関係I(父方祖母-父関係)は、希薄な父子関係I(父方祖父-父)と対になっていると理解して差し支えないだろう。このパターンを反復する形で、父親はわが子との間で、希薄な関係(父子関係II)しか形成しない可能性が高くなる。複数の子どもがいる場合には、母親との過度な密着傾向が強い子ども(IPになる可能性が高い)との父子関係の形成がとりわけ困難になる危険性が高まる。

2. 母性によって支えられた「父権」の深層構造

(1) 儒教文化の潜在的影響

少なくとも明治期以降のわが国の父性の変化や世代的な差異を検証するにあたって、第2次世界大戦における敗戦とそれに続く欧米文化への全面的な依存と受容の経緯を無視することはできない。同時に、それは家父長制や男尊女卑の思想を支えてきた儒教文化との決別をも意味していた。しかし、経済の高度成長によってわが国が大国意識を回復する過程で、捨て去られたはずの「儒教文化」の深層構造が密かに再生していたのではないだろうか。つまり、公平・平等・博愛を掲げる戦後民主主義の表看板の裏側では、明治以前の数百年の年月で日本人の心性の基底を構成するまでになった儒教文化由来の上位下達や忠孝の意識に基づく人間関係が、中央集権化した官僚主義や「護送船団方式」と呼ばれる社会システムとして、復活・再生していたという仮説である。

筆者のいささか唐突なこの仮説を多少とも裏付けるために、儒教の源流である中国の儒教を研究対象としている研究者の最新の研究成果を基に、戦後のわが国における儒教の潜在的な影響と父性の関係に

ついて詳しく見ていくことにしよう。中国女性史という、臨床領域の専門家にはなじみの少ない分野の研究者である下見(1997)は、中国の『列女伝』などの伝記資料や種々の女性教導関係資料の分析・整理による研究を続け、儒教社会における女性の存在意義や役割について考察している。そして、親への服従・奉仕を本質とする「孝」の観念の形成に、母(母性)が重要な役割を果たしていることをつきとめ、その要点を次のように整理している。

「儒教社会における母は、母性による慈愛・保護を通して、まず子のところに親への信頼・依存・親愛の情を形成する。さらには、母は、この母性の威力に依拠して、厳正な管理・教訓指導で子に対応して、親への服従奉仕たる「孝」を教示する。孝の精神を確立した子は、成人して妻を迎えて家長となる。妻は、母の母性をさらに発展的に展開して夫に施行する。すなわち、貞節と女卑従順を自覚し、この姿勢を堅持して夫を支援し、夫に男尊の自覚を持たせて、独断専行をうながし許容する(傍点筆者)。このようにして、彼を家族制における主導責任者に定め置き、家と親(祖霊)への「孝」である服従・公への忠義実践を促し導くのである。また、娘と父との間にも、親子の関係としての「孝」の要素が混在するが、基本的に、妻と夫の対応にほぼ類似した関係が認められる。「孝」(忠)は、母性によって養成される観念であり、それは子においても夫や父においても、個の権利や主張を抑圧して、家や一族・血縁(また公の権力)のために奉仕する精神として機能している」(pp.12-13)。

要するに、下見の結論によれば、「孝」の実践を要請する儒教社会は、本来、子の自立・独立を拒絶して抑圧して、個の権利の主張を許容しない社会であり、したがって、基本的に子が親に従属・依存して、これから自立しないことを人間的理想とした社会だということになる。このような視点に立つと、忠孝による社会の構築を企図した儒教社会である、近世の日本で、なぜ母なるものへの特殊の扱いが必要とされ、「母性社会」とさえ称されるのかが、改めて理解しやすくなる。おそらく、教育問題である過保護や子の親

からの精神的自立、家庭や夫婦関係などの諸問題の深層構造に、意外にもなお「親孝行」の観念を中核とする儒教の人間観が影を投じているのではないだろうか。戦後の社会の発展・変化を推進した個人の力も、実は、儒教社会的な母性につちかわれる「孝」と同様の服従・奉仕の精神に発するものであったと推測される。

(2) よい子の破綻と父性への要請

上記の主張は、日本人のライフスタイルがますます欧米化し、伝統的な文化や人間関係が急速に失われている現状とは相容れないようにも見受けられる。しかし、われわれが心理臨床の実践を通じて出会う問題をかかえた親子の深層構造を凝視すれば、そこに互いに個としての自立の困難さに呻吟する母子の姿が浮かんでくる。それらの事例の共通項を、素朴に表現すれば、「よい子の破綻」である。家庭内暴力、不登校、あるいは接食障害など、問題の現れ方は異なっているけれども、母親の意向に添ってよい子を続けてきた子どもが、思春期になり、学業不振や友人関係の破綻などを契機にその期待に応えられない状況におかれ、やがて個々の症状を呈するようになるパターンである。

戦後の母親達が願った「よい子」とは、言葉を変えれば、親を喜ばすことができる「親孝行な子ども」にほかならない。違いがあるとすれば、戦前までは儒教的道徳観を背景にして親が子どもに親孝行を強いたのに対し、孝行という言葉が死語と化した戦後にあつては、親が望ましいと判断した行動様式を、「子どもの将来のため」という名目で選択させるようになったことだろう。しかし、下見が指摘するように、親を喜ばせることを儒教文化における親孝行の真髓だと理解すれば、戦後の親子関係の本質は、戦前のそれとさほど違いはないのかもしれない。少子化の進展を考慮すれば、子どもが自らの自然な欲求に従って行動を選択するよりも、親の選択に従う傾向がさらに強化された側面もある。つまり、表向き儒教固有の言葉が使われなくなっただけで、戦後の母子関係の内実は、子どもが親の喜ぶ行為を献身的に行うとい

う儒教文化の伝統に添ったものだったのである。

そこには、父親の立ち入る余地はなく、「父親不在」は構造的なものであったといえよう。繰り返すまでもなく、母性に支配された儒教文化の弊害は明らかである。団塊世代までの父親は、60年代後半に反儒教的ともいえる対抗文化ののろしをあげたものの、その挫折や経済発展に伴う儒教文化の水面下での復興に加担せざるを得なかった。バブル経済の崩壊後は、その基盤が再び、揺らぎは始めている。いまこそ、儒教文化の亡霊から日本人が開放され、ポスト団塊世代の父親を中心として子育てに父親も直接参加できる文化的背景が整いつつあるのではないだろうか。

3. 父親としての自立

(1) 夫婦による「父親」のデザイン

論点がかかり錯綜してきているので、再度図1を使って父親の現状を具体的に捉えなおしてみよう。まず、父子関係Ⅱと母子関係Ⅱの關係に注目すれば、結局のところ、夫婦関係Ⅱが問題解決の鍵を握っていることに気づく。父子関係Ⅱと母子関係Ⅱの相互調整ができるのは、夫婦関係Ⅱにほかならないからである。ただし、すでに述べたように、儒教文化をひきずる父方の母子関係Ⅰが、背後から影響を及ぼす可能性が高く、団塊世代も例外ではない。これに対抗できるのは、母方の母子関係Ⅰである。団塊世代に比べてポスト団塊世代では、母方の母子関係Ⅰがさらに強化されている可能性（フェミニズムの後押しを受けて）が高く、父方母子関係Ⅰの独走を抑制する状況が顕著になっている。

ポスト団塊世代の夫婦でも、両者の母子関係Ⅰの影響が強すぎれば夫婦関係Ⅱは弱体化する危険性ははらんでいる。そこで、その危険性を回避するためにも、夫婦関係Ⅱの絆を強化しておかねばならない。具体的には、不登校状態にあるIPの問題について夫婦が十分に話し合うことが必要である。それができない夫婦には、夫婦療法や家族療法がふさわしく、そ

こで失われていた「父親のデザイン」を、父親のみならず夫婦共通の課題として取り組むことが問題解決にはきわめて有効である。

(2) 変化しつつある父親

ポスト団塊世代の父親の姿はすでに現実のものとなりつつある。全国各地に「おやじの会」と称した父親のボランティア・グループが結成され、社会的地位や業種の違いを超えた「普通の父親」同士の教育や子育てをめぐる協議の場が拡大しているからだ（亀口, 1999）。なかでも、大規模な活動としては日本青年会議所（会員資格は40歳未満であり、正真正銘のポスト団塊世代の父親が構成する団体である）の九州地区協議会が、独自に九州全域の小学校90校に在籍する12,238名の子供を対象とした実態調査を行ったことは注目される（日本青年会議所九州地区協議会, 1998）。それまでほとんど学校へ足を運ぶこともなかった若い父親達が直接小学校に出向いて学校関係者と交渉し、子ども達に情動教育（EQ）に関わる意識を尋ねるアンケート調査を実施し、しかも自力で集計作業を達成した（1人150時間以上を要している）こと自体、大きな意味を持つと言えるだろう。アンケート結果には、若い父親達の予想を超えた

子ども達の実態が映し出されていたこともあって、報告会での反響は大きく、東北地方など他の地区の会員も巻き込む形で論議が継続し、全国的な活動に発展しつつある。

そこには、変わりつつある日本の父親の姿を垣間見ることができる。しかし、同時に、子育ての悩みを夫にも話せず、悶々としているポスト団塊世代の若い母親の存在も無視できない。匿名性を確保できる育児雑誌の投稿欄が、彼女達にとってのある種の駆け込み寺となっている現状を忘れてはならない。儒教文化の亡霊は、いまだ霊力を失っていないようである。

文 献

- 1) 亀口憲治：家族における父親役割の変遷と機能 家族療法研究, 15, 71—79, 1998.
- 2) 亀口憲治：現代家族への臨床的接近 ミネルヴァ書房 1997.
- 3) 下見隆雄：『考と母性のメカニズム—中国女性史の視座』研文出版, 1997.
- 4) 亀口憲治：家族臨床の視点から見た子どもの心の発達, 小児保健研究, 1999.
- 5) 子供教育委員会（日本青年会議所九州地区協議会）みんなでひろげよう「心スタ・ジュニア」づくり 日本青年会議所九州地区委員会, 1998.